

外国語（英語）科学習指導案

日 時 令和5年2月22日（木）
第5校時 13:35～14:25

対 象 第1学年A組

学校名 渋谷区立松濤中学校

授業者 主幹教諭 橋本晋作

会 場 体育館

1 単元名

Unit 11 “This Year’s Memories” *NEW HORIZON English Course 1*

2 単元の目標

学校説明会に参加する小学生へ松濤中学校の魅力を紹介するために、印象に残った行事や、それと関連して自分が頑張ったことをまとまりのある文章で書くことができる。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<知識> ・場所を表す there is(are)～. や動詞の過去形の特徴やきをまりを理解している。 <技能> ・年間行事や、それと関連して自分が頑張ったことに関する正確かつ魅力的な情報を、there is(are)～. や動詞の過去形、その他既習事項を用いて書く技能を身に付けている。	学校説明会に参加する小学生へ松濤中学校の魅力を紹介するために、印象に残った行事や、それと関連して自分が頑張ったことをまとまりのある文章で書いている。	学校説明会に参加する小学生へ松濤中学校の魅力を紹介するために、印象に残った行事や、それと関連して自分が頑張ったことをまとまりのある文章で書こうとしている。

4 言語材料

- ・Be 動詞の過去形
- ・場所を表す there is(are)～.
- ・過去進行形
- ・これまでの既習表現

5 指導観

(1) 単元観

本単元は、中学校学習指導要領（平成29年3月告示）第2章第9節 外国語 第2 各言語の目標及び内容等 英語 1目標

(3) 書くこと

イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。

を受けて設定した。

言語材料では、2 内容〔知識及び技能〕(1)エ(ウ)文法事項

e 動詞の時制及び相など のうち、過去形、過去進行形

を取り扱う。

言語活動としては、2内容〔思考力、判断力、表現力等〕(3)①カ 書くこと

(ウ) 日常的な話題について、簡単な語句や文を用いて、出来事などを説明するまとまりのある文章を書く活動。

を指導の重点に置く。

言語の取り扱いとしては、2 内容(3)②イ 言語の働きの例

(ウ) 事実・情報を伝える

・説明する ・報告する ・発表する ・描写する

のうち、主として「発表する」を扱う。この学年では、話すこと（やり取りや発表）と並行して1年間かけて指導してきた書くことの集大成として、日常的な話題について簡単な語句や文を用いて、出来事などを説明するまとまりのある文章を書く活動（最終的にパフォーマンステストを実施）を行う。

教科書では、登場人物が1年間の思い出を紹介する場面を取り扱っている。言語材料としては、前単元に続いて動詞の過去形を主として扱っており、過去の出来事について説明をしたり、感想を述べたりすることを目的としている。

本校は渋谷区英語教育重点校に指定されており、毎年の学校説明会には本校での英語学習に高い意欲を示す小学生と保護者が多く集まる。そのため、本校で1年間学習するとどのくらいの英語力が身につくのか、本校にはどのような行事があるのか、その中でどう成長したのかといったことを英語で紹介する必然性が生まれるため、2にあるような目標を設定した。本校の1年生も昨年度の説明会のイメージが記憶に新しく、今度は未来の後輩たちのためというモチベーションをもたせることで、この活動に意欲的に取り組ませたい。

(2) 生徒観

本校は渋谷区英語教育重点校・国際理解教育推進校に長らく指定されており、パーシャルイマージョン教育を行っている。英語科の授業だけでなく実技教科、行事等様々な場面で英語を用いている。加えてALTが4名常駐し、あらゆる活動に参加しているため、生徒たちは英語に親しむ環境にある。授業については1クラス2展開または2クラス3展開の習熟度別少人数クラス編成となっている。

令和5年12月に1学年87名対象に行った生徒アンケートにおいて、それぞれの設問に対し4段階評価中4「とても当てはまる」（以下4）、3「当てはまる」（以下3）、2「あまり当てはまらない」（以下2）、1「全く当てはまらない」（以下1）で回答させたところ、次のような結果となった。（単位：％）

設問内容	4	3	2	1
英語を学習することが楽しい。	45.6	40.5	6.3	1.3
英語の授業で学習したことがわかる。	40.5	51.9	7.6	0.0
英語を学習するときに、友達と話し合ったり教え合ったりしている。	45.6	45.6	8.9	0.0
英語の学習で分からないことがあるときは、周りの人に聞いている。	48.1	41.8	8.9	1.3
英語の活動で自分の考えをもつことができる。	41.8	45.6	12.7	0.0
英語の活動で自分の考えたことを英語で話すことができる。	24.1	49.4	25.3	1.3
英語の活動で自分の考えたことを英語で書くことができる。	20.3	39.2	36.7	3.8

以上の調査結果から、英語を楽しみながら学び、90％前後の生徒が話し合いや学び合いの意識をもっていることが分かる。英語の学習が楽しいと感じている割合は、今年度実施した全国学力・学習状況調査の意識調査における割合（比較対象学年は異なるが、小学6年生の全国69.3％・東京都65.8％、中学3年生の全国51.9％・東京都53.9％）よりも3割前後高い。また、自分の考えをもつことができると感じている

生徒が約90%いることも1年間の指導の継続の成果と考える。

一方で、自分の考えをもつこと、話すこと、書くことができると考えていない生徒の割合が段階的に増えていることがわかる。これは2つの領域の難解さに加えて、授業の言語活動において語彙や語順に自信がないことにも起因していると思われる。今後はさらに「間違えて当然」「間違いから学ぶことが多くある」という安心感の中で活動に取り組めるようにしていく。また、考えをもつことから話す・書くことにおいても1時間の授業だけでなく単元を通してスモールステップをふみながら段階的に指導していく。その中でクラスメイト間の共有や教師からのフィードバックによって内容面や言語面の気づきを与えることで、自身の学びがブラッシュアップしていくことを体感させることに重点を置く。

本校は英語教育重点校であるが故に、ALL ENGLISH かつレベルの高い授業ができるという誤解がよくなされる。確かに海外生活を経験した生徒はいるが、9割以上は中学校から本格的に英語の勉強を始めたごく普通の生徒たちである。しかし、1年間の指導の成果もあり、昨年11月に実施した英検 IBA の結果は、英検準2級合格相当が16.4%、3級合格相当が44.7%、4級合格相当が31.7%、5級合格相当が7%となった。(力はあるが受検しない生徒もいるため英語検定の結果でなく全員実施の英検 IBA の結果を記載した。ただし英検 IBA はリスニングとリーディングのみであるため、スピーキングとライティングについては先述のように指導していく。)

例年に比べると fast learner の数は決して多くないが、8(2)⑦にあるように授業中や授業後にはよく質問に来たり、自分で調べたりわかったことをノートに沢山書いてくるなど、英語への関心が高い生徒が多くなってきている。確かな英語力を育てるために、理解したことをしっかりとアウトプットさせながら、毎時間の授業での積み重ねを大切にしている成果と捉えたい。

(3) 教材観

単元の目標である「学校を紹介するために、印象に残った行事や自分が頑張ったことを書く」ことに向け、教科書内容と関連付けた話題に関してまずやり取りし、本文を聞き、読み、再度話し、終末に書くことを通して、本文表現の定着と繰り返し書く経験を積ませることを目指す。これらを通して、単元目標に向けた書くことにおける表現の幅を広げていく。また、まとまりのある文章を書くことも目標としていることから、構成についても指導する。その際、自ら構成を考えることから始め、教科書本文の構成や表現、タブレットで共有したクラスメイトの構成や表現を参考にさせることで、回数を重ねるごとに自身の文章をブラッシュアップさせる機会をもつ。

なお、教科書本文の構成として、第一部で登場人物がこの一年間で頑張ったことを、第二部で印象に残った行事を、そして第三部で今年度の思い出をそれぞれ紹介している。このことから、単元指導計画の構成も本文の話題に関連させたものにしていく。これは、授業のインプットからアウトプットまでを本文内容を通して一貫した指導を行うことと、本文表現を模倣することで英文を書く際の助けとすることが理由として挙げられる。

また、共通のエラーやよい表現、表現しなかったけれどできなかった表現を集約・提示し、生徒同士が学び合う経験を繰り返し得られるようにしている。

6 年間指導計画における位置付け

前単元では、年末年始の思い出について相手に伝えたり質問したりした後に書く活動を行った。その際、自分が過去にしたことを簡単な語句や文を用いて即興で話したり書いたりする力を養うことを目標とした。そこで身に付けた力に加えて本単元では、学校紹介のために1年間を振り返り、学校行事や自分が頑張ったことをまとまりのある文章で書く活動にステップアップさせる。

また、本単元で扱う文法的なつながりとして、動詞の過去形の特徴を復習し、そのうえで過去進行形などの表現の特徴を加えて指導する。

まとまりのある文章を書くことと社会とつながる探究的な学び(8(3)ア参照)という観点においては、Unit 5“A Japanese Summer Festival”において、単元目標を「来年度のふるさと渋谷フェスティバルのイベントを企画し、主催者に提案するために、場所などの正確な情報や、外国人が集まる魅力的なイベント情報を書くことができる。」とした。生徒は独自のイベントを企画しデジタル広告を作成した。後日

実際に区の主催者に提案し、来年度のフェスティバルに参画することを計画している最中である。

他にも、Unit 7 “Foreign Artists in Japan”において、日本で活躍する外国人について調べ、まとまりのある紹介文を作成した。それだけでなく、2月の校外学習において、日本に語学留学に来ている学生にやり取りの中で、自分が調べた日本で活躍する外国人の紹介を行った。加えて、11月に行った職場体験後にはまとまりのある文章でレポートを書き、国際交流の一環で台湾から来校した生徒たちに、日本の中学校の取組として紹介した。このように、学年や学校の行事にあわせて教科横断的に指導し、学びが最終的に実社会とつながるよう工夫している。

7 単元の指導計画と評価計画 (8時間扱い)

時間	ねらい (■)、言語活動等 (丸数字)	知	思	態	備考
1 (本時)	<p>■単元の目標を理解し、見通しをもつ。</p> <p>■この一年間松濤中学校で頑張ったことを書く。</p> <p>①やり取りを通して単元の目標を理解し、見通しをもつ。</p> <p>②教師とのやり取りを通して、動詞の過去形に関する表現や本文の導入部分を理解する。</p> <p>③登場人物がこの一年間で頑張ったことを理解する。その際、文章で使われている新出語彙や文法の意味・用法を自ら推測する。同時に、わからないことへの寛容さを身に付ける。</p> <p>④自分の理解度に伴い、自己調整しながら音読する。</p> <p>⑤この一年間松濤中学校で頑張ったことを、本文表現も参考にしながら印象に残った行事・そこで頑張った事・感想の3文程度の構成で書く。</p> <p>⑥言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をタブレットに入力する。</p>	<p>ねらいに即して生徒の活動の状況を確実に見届けて指導に生かすことは毎時間必ず行う。活動させているだけにならないよう十分留意する。</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・新出単語や文法は教科書本文の文脈の中で、意味を推測させ、使い方についても生徒の気付きを大切にする。 ・デジタル教科書を用いた個別最適な学習として、本文の音読を行う。自分に合った速度で練習することで、本文表現の定着を促し、自然にアウトプットできるようにする。 ・どの時間もペアでのやり取りを行わせながら、ブレインストーミングや理解度の確認を行う。やり取りや作文の後は、教員から表現内容の適切さと英語使用の正
2	<p>■この一年間松濤中学校で頑張ったことをより詳しく書く。</p> <p>①帯活動 (過去にしたことと感想などのやり取り)</p> <p>②前時の復習 (本文内容と辞書指導)</p> <p>③前時に習った表現を用いたパンプラクティスに取り組む。続けて自己表現活動につなげる。</p> <p>④前時のフィードバック</p> <p>⑤この一年間松濤中学校で頑張ったことを、本文の表現や構成も参考にしながら、頑張った内容の詳細を、1文を付け加えて4文程度で書く。</p> <p>⑥言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をタブレットに入力する。</p>				

3	<p>■この一年間松濤中学校で頑張ったことを、行事の説明を加えて書く。</p> <p>①帯活動（過去にしたことと感想などのやり取り）</p> <p>②教師とのやり取りを通して、there is/are～.に関する表現や本文の導入部分を理解する。</p> <p>③登場人物がこの一年間で印象に残った行事の内容を理解する。その際、文章で使われている新出語彙や文法の意味・用法を自ら推測する。同時に、わからないことへの寛容さを身に付ける。</p> <p>④自分の理解度に伴い、自己調整しながら音読する。</p> <p>⑤前時のフィードバック</p> <p>⑥この一年間松濤中学校で頑張ったことを、本文の表現や構成も参考にしながら、行事の説明を付け加えて5文程度で書く。</p> <p>⑦言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をタブレットに入力する。</p>	<p>ねらいに即して生徒の活動の状況を確実に見届けて指導に生かすことは毎時間必ず行う。活動させているだけにならないよう十分留意する。</p>	<p>確さを含めたフィードバックを与える。適切さについては、目的・場面・状況に適していたかを、正確さについては言語面（賞賛、訂正、新表現の導入）に関して指導する。</p> <p>・各時の終末には、言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をアンケートアプリで集計し、次の授業でフィードバックすることで、単元末活動の助けとする。</p>
4	<p>■この一年間松濤中学校で頑張ったことを、経緯を説明しながら詳しく書く。</p> <p>①帯活動（過去にしたことと感想などのやり取り）</p> <p>②前時の復習（本文内容と辞書指導）</p> <p>③前時に習った表現を用いたパンプラクティスに取り組む。続けて自己表現活動につなげる。</p> <p>④前時のフィードバック</p> <p>⑤この一年間松濤中学校で頑張ったことを、本文の表現や構成も参考にしながら、最初にうまくいかなかったことや努力したこと、その結果変化したことを付け加えて6文程度で書く。</p> <p>⑥言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をタブレットに入力する。</p>		
5	<p>■この一年間松濤中学校で頑張ったことを、感想を含めて構成を意識しながら書く。</p> <p>①帯活動（過去にしたことと感想などのやり取り）</p> <p>②教師とのやり取りを通して、過去進行形に関する表現や本文の導入部分を理解する。</p> <p>③登場人物の今年度の思い出と感想の内容を理解する。その際、文章で使われている新出語彙や文法の意味・用法を自ら推測する。同時に、わからないことへの寛容さを身に付ける。</p> <p>④自分の理解度に伴い、自己調整しながら音読する。</p> <p>⑤前時のフィードバック</p> <p>⑥この一年間松濤中学校で頑張ったことを、本文の表現や構成も参考にしながら、感想を付け加えて7文程度で書く。</p> <p>⑦言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をタブレットに入力する。</p>		
6	<p>■この一年間松濤中学校で頑張ったことを、今後の決意を含めて構成を意識しながら書く。</p>		

	①帯活動（過去にしたことと感想などのやり取り） ②前時の復習（本文内容と辞書指導） ③前時に習った表現を用いたパンプラクティスに取り組む。続けて自己表現活動につなげる。 ④前時のフィードバック ⑤この一年間松濤中学校で頑張ったことを、本文の表現や構成も参考にしながら、今後の決意を付け加えて8文程度で書く。 ⑥言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をタブレットに入力する。	ねらいに即して生徒の活動の状況を確認に見届けて指導に生かすことは毎時間必ず行う。活動させているだけにならないよう十分留意する。			
7	■動詞の過去形についての特徴やきまり、使い方について確認する。 ①単元を通して扱ってきた目標表現について、使用場面や機能、既習事項との違い等を振り返る。 ②前時までには自身の作成した文章について、文法面から確認し、正確性の向上を踏まえて修正する。				
8	■学校説明会に参加する小学生へ松濤中学校の魅力を紹介するために、印象に残った行事や、それと関連して自分が頑張ったことや感想・決意をまとまりのある文章で書く。 ①単元目標とタスクに含める条件を確認する。 ②前時で書いた文章をペアやグループで読み合い相互評価する。 ③前時までには集約した言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現や、全体におけるグローバルエラー、良い表現などを確認する。 ④②と③を受けて自分の文章を修正する。 ⑤印象に残った行事や、それと関連して自分が頑張ったことや感想・決意をまとまりのある文章でタブレットに入力する。（後日提出）	○	○	○	※1参照
後日	定期考査（パフォーマンステスト）	○	○	○	※1・2参照

<※1>第8時の評価について

・この作品の結果を本単元の評価情報の参考として記録に残す。知識・技能については、目標文法の使用が見られなかった場合、定期考査の結果を加味する。主体的に学習に取り組む態度についてはこの時間だけに限らず日々の授業における言語活動への取組状況を勘案する。

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（中学校外国語）」（国立教育政策研究所 令和2年3月）参照

<※2>パフォーマンステストにおける「思考・判断・表現」の評価の条件

単元を通して指導したことを踏まえて3つの条件を全て満たしていれば「b」とする。

条件1	松濤中学校で印象に残った行事を書いている。
条件2	その行事と関連して自分が頑張ったことを書いている。
条件3	松濤中学校で印象に残った行事や自分が頑張ったことについて感想や決意を書いている。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	文法や語順など誤りのない正しい英文で書くことができる。 （難解な語や未習語の綴りの	頑張った理由や経緯などの詳しい情報を追加しながら、3つの条件を満たして書いている。	頑張った理由や経緯などの詳しい情報を追加しながら、3つの条件を満たして書こうとし

	誤りについては許容する)		ている。
b	誤りが一部あるが、コミュニケーションに支障のない程度の英文を用いて書くことができる。	3つの条件を満たして書いている。	3つの条件を満たして書こうとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

<最終的に目指す文章例> ※本文の表現も積極的に活用させながら、まとまりのある文章を目指す。

<p>In April, we had an entrance ceremony. I remember this event very well. On the first day of school, I was so nervous. My heart was beating fast on my way to school. (行事・感想)</p> <p>But I really wanted to study English here, because this school is so famous for English. In the first semester, I felt English lessons were so difficult. But I studied English very hard every day. Then I could understand in the second semester. (頑張った事・経緯・理由)</p> <p>There are many events in English in this school. I enjoyed them very much and I am good at speaking English now. I got grade 3 of Eiken this year. Now, I am studying very hard to get pre-2! (感想・決意)</p>
--

8 指導に当たって

(1) 授業形態の工夫

日頃からペア活動を多く取り入れている。ペアは原則として男女とし、どちらか一方は英語が得意な生徒になるよう組合せを配慮している。また、自分の考えをペアの相手に伝えさせたり説明させたりすることで、自分の理解度を把握させ、目標表現や内容理解の更なる定着を図っている。これを繰り返すことで、1時間の授業の中で生徒一人一人が継続して思考しアウトプットすることを可能としている。

やり取りや発表では、個で考えるところからペア、グループ、クラスといった形で活動形態を変え、情報共有の輪を広げていくことにより、様々な考えを取り入れ、思考が深まるよう心掛けている。ペアやグループでは、英語が得意な生徒をアシスタントティーチャーとして中心的な役割を担わせ、言語活動の進行や理解が遅れがちな生徒の補助をさせている。

(2) 指導方法の工夫

① 基本的に授業は英語で進めているが、活動前に詳細な説明や難解な説明を要する場合などは、ジェスチャーや視聴覚教材、端的な英語で言い換え、デモンストレーションの形で示している。生徒の理解度の確認についても ICQs(Instruction Checking Questions)を用いて行っている。それでも理解が難しい場合に限り、日本語を使用している。オールイングリッシュはあくまで手段であり目的にならないよう留意している。

加えて、3年間を通して、教師だけでなく生徒にいかに関心を話させるかという点に力を入れている。活動でよく使う表現や、英語で何と言ったらいいかわからない場合に質問するフレーズなどのクラスルームイングリッシュに加えて、考えを共有する際にも極力英語で行うことを目標としている。その際には予め型を与えることで助けとしている。本文の内容理解については、まだ1年生の段階においては既習語彙に限られていることから日本語も使用させているが、徐々にパラフレーズや例示、ジェスチャーなどを用いるよう指導していく。これについても教師の英語と同様、手段が目的にならないよう気を付けている。

いずれにしても、英語を英語のまま理解し、日本語を介さずに単語でもいいから相手に伝えるという意識付けに注力している。教師はモニターをし、語順指導などを交えながら徐々に文で表現できるように心がけている。

② 講義などの受け身の学習よりも、他人に教えたり体験したりして学ぶ能動的学習の方が学習定着率が高いと考え、本文の内容理解などを含むあらゆる場面において、パートナーの生徒に説明させるようにしている。そうすることで、自分が本当に理解しているのかを確認する機会としている。

③ 新しい語彙や文法事項を導入する際は、教科書本文の文脈の中で、意味を推測させ、使い方についても生徒の気付きを大切にする。あわせて、分からないことを受容する態度を養っている。

④ ②・③と関連して、インプットからアウトプットまで徐々に積み上げるのではなく、最初にアウトプットさせ、ブレインストーミングやできない経験をさせている。単元目標や本時の目標に必要

な要素をインプットするための必然性や意欲をもたせることで、インプットをより能動的なものにしている。このようにアウトプットとインプットの往復を繰り返しながら、スモールステップを踏み、目標達成にアプローチしている。

- ⑤ ICT を効果的に活用し、生徒の日々の暮らしに即したものを取り上げることで、生徒の興味・関心を高めるよう心掛けている。ICT を活用するもう一つの利点として、板書する時間の短縮により、その分生徒の発話量を確保することができるタイムパフォーマンスが挙げられる。これらの取組を通じて生徒の話す力を高めつつ、最終的な目標文の活用までつながるように、教師が導入で話した英語を生徒にも話させている。
- ⑥ アウトプットさせる以前に目標表現を必然的に使わせる目的・場面・状況設定を行っている。また、本文を扱う際にも他人事で終わらせず、自分事として捉えアウトプットさせるよう工夫している。
- ⑦ 授業中に出た質問や活動を通して気付いた点などを板書し、授業後にカメラ機能で記録し配信することで、クラスを超えて学びの共有ができるように心掛けている。加えて、生徒には常に疑問をもちながら授業を受けるよう伝えている。わからないことやもっと知りたいことは自分で調べたり教師に質問したりして自主的にノートにメモしたり家庭学習するなどして、自立した学習者の育成を目指している。
- ⑧ ペアやグループでのやり取りや情報共有、作文の際、教師はファシリテーターの役割に徹し、適切さと正確さについて指導している。適切さについては、目的・場面・状況に適していたかを、正確さについては言語面（賞賛、訂正、新表現の導入）に関して指導している。
- ⑨ 学校でしかできないことと家でもできることの精査を意識している。50分という授業時間を最大限にいかすため、家でできることは行わせることで自立した学習者の育成を目指している。具体的には授業でわからなかったことや更に学びたい事についてノートにまとめたり、ドリル学習や音読をしたりすることがそれにあたる。一人一台タブレットを使用できるようになったことで、個別最適な学習とも関連付けて活用させている。一方、学校でクラスメイトと対面し、対話的・協働的に学ぶことを学校でしかできないことと位置付けている。具体的にはペアでのやり取りやグループ活動などがそれにあたる。1年次は教員主導の授業スタイルだが、(3)エにあるように徐々に教員の手を離れ、自主的に探究的な学びに向かえるようにナビゲーターとしての役割を果たしていく。

(3) 教材の工夫

ア 社会とつながるタスクの設定とオーセンティックな教材による探究的な学び

学びを教室内に留めず、現実社会とつながるタスクを設定することにより、生徒の活動意欲を高めている。そのために特に地域や生徒の実態に即したオーセンティックな教材を用意している。目標文法は当然指導し定着を目指すすが、それらに縛られすぎず、あくまでタスクを達成することを目標とし、それを目指す過程で既習事項や目標文法にスパイラルに接することで、自然と表現が定着するものと考えている。

イ デジタル教科書を活用した音読活動

デジタル教科書の音声機能を生かして、自分の習熟度に合わせて音声速度を調整させながら、音読活動に取り組みさせる。また、音読で本文表現を定着させることで、発話や作文の際に引用できるようにすることを目的としている。そのために、授業で定着しなかった発音などを家庭で確認させながら何度も練習する個別最適な学習としてとらえており、クラウドを使って定期的に音読動画を課題として提出させている。なお、授業での音読活動は毎時間行っているが、言語活動の時間を多く確保する観点から必要最小限としている。音読そのものが目的とならないようにすることと、音読は家庭において個人で行えるものと判断しているため、8(2)⑨にあるように学校でしかできない活動を優先していることが理由として挙げられる。

ウ アンケートアプリケーションを活用したデータ集約とフィードバック

やり取りで言いたかったけれど言えなかった表現、作文の際に書きかけたけれど書けなかった表現をタブレットで入力させ、その内容を一覧化して生徒に示す。その中で共通するものを中心にフィードバックし、やり取りや作文の際に使えるよう指導する。また、ブレインストームや作文した内容を共有することで、他者から新たなアイデアを得たり、自分の考えをブラッシュアップしたりする機会

としている。

エ 言語面での正確さを育てるための語順指導と辞書引きによる語彙指導

自分の表現したいことを相手に正確に伝えるという基本を定着させるために、語順表を配布したり、随時フィードバックをしたりしながら生徒に意識させている。また、年度当初から継続して行ってきた辞書引き活動においては、本文で登場した語彙の同意語、反意語、派生語などを意図的・計画的に指導し、語彙の拡充に努めている。

オ AIによるライティングの添削

ライティングの新たな試みとして、AIによる添削を取り入れている。まず自力で書き、ペアで相互にフィードバックをし合った後に、家庭学習としてAIの添削を行わせることでペアチェック時には気づけなかった綴りや文法などの言語面の気づきを促す。留意点として、事前に翻訳機能については使用しないことを指導している。翻訳した英文の貼り付けは自身の英語力向上につながらないこと、読み手を意識した英文や自身が表現したい内容になっていない可能性があることが理由として挙げられる。AIに添削をしてもらった後も、ただ貼り付けるのではなく、なぜそうなるのかを考えたり調べたりすることや、本当に自身の表現したい英文になっているかを取って翻訳機能を使って調べることも併せて指導している。

9 本時(全8時間中の第1時)

(1) 本時のねらい

- ・単元の目標を理解し、見通しをもつ。
- ・この一年間松濤中学校で頑張ったことを書く。

(2) 本時の展開

時	○学習内容 ・学習活動	指導上の留意点・配慮事項
挨拶 ・ 導入 6分	○Greeting ○Teacher Talk ○Starting Question → Chat 1 →Sharing	・日本語から英語に意識を切り替え、生徒が英語を使おうとする気持ちを高める。 ・中学校生活1年目が終わることについての話から始め、どんな行事があったかを振り返ることで、本時への導入とする。 ・どの行事が印象的であったか、そこでどんなことを頑張ったかなど、ペアでやり取りさせる。その際最初に個で考える時間を与える。
展開 30分	○Confirmation of Unit Goal <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">Unit Goal: You can make a slideshow to introduce SHOTO to elementary students at a school orientation.</div> ○Confirmation of Today's Goal <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">Today's Goal: You can write about what you did very hard in Shoto.</div> ○Oral Introduction ○Listening → Sharing	・単元のゴールを確認後、単元の見通しをもたせる。その際、目標となる成果物を提示しイメージさせる。 ・本時の学習の流れを提示し、見通しをもたせる。 ・状況説明から Listening につなげる。 ・Picture Card を見せながら登場人物が1年間で頑張ったことを聞き取らせ、話の概要を確認させる。

	<p>○Reading → Sharing</p> <p>○Reading aloud</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Repeat ・ Role ・ Overlapping with a tablet <p>○Chat 2</p>	<p>Q1: What school event does Kaito remember? (印象に残った行事)</p> <p>Q2: What did Kaito do very hard at the event? (そこで頑張ったこと)</p> <p>Q3: How did Kaito feel? (感想)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 理解を深めるために登場人物が1年間で頑張ったことを読み取らせ、話の詳細を確認させる。 ・ わからない表現には下線を引き意味を推測させた後シェアさせる。その際、パラフレーズや例示、ジェスチャーなどで英語のまま共有させる。難解な場所については様子を見て日本語で解説する。 ・ タブレットを使うときは発音確認や速度調整しながら読む。 ・ Listening や Reading で理解した表現を参考に再度、今年松濤中学校で頑張ったことについてやり取りを行う。
<p>まとめ</p> <p>14分</p>	<p>○First Writing</p> <p>○Second Writing</p> <p>○Reflection</p> <p>○Greeting</p> <p>○Uploading what we studied</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書本文から登場人物の作文構成 (印象に残った行事・そこで頑張った事・感想) を例示する。それを参考に自力で書かせる。その際、間違いを気にせず書くことを伝える。目標は3文とし、それ以上書けそうな生徒は書くように促す。様子を見て必要であれば Slow learner 向けに登場人物の本文構成を提示したり、語順表を参考にさせたりする。 ・ 書いた英文をペアで確認させ、必要に応じて正確な文に修正させる。 ・ 本時の振り返りと、言いたかったけれども言えなかった・書きたかったけれども書けなかった表現をタブレットに入力する。 ・ 時間がない場合は宿題とする。 ・ 宿題を伝える。自身の書いた英文について、AI を用いて添削を受けたものをオンラインで提出させる。 (Third Writing) ・ 本時の頑張りを称える。 ・ 本時のスライドや授業で主に生徒から出た表現などを板書した内容を授業者がカメラ機能で記録し、クラウド上にアップする。このことで欠席者への配慮や家庭学習への補助とする。

(3) 板書計画

Today's Goal

生徒から出てきた表現などを必要に応じて板書

Today's Menu

(4) 授業観察の視点

ア 単元のねらいを達成するために、本時の各活動は効果的であったか。(どこが効果的か、効果的でないか。また、その要因は何か。)

イ 授業の組み立ては生徒がスモールステップを踏みながら本時の目標を達成できるような流れになっていたか。各活動が有機的につながっていたか。